

京都 教育センター通信

【発行】京都教育センター事務局

〒606-8397

京都市左京区聖護院川原町4-13

京都府教育会館3階

TEL & FAX 075-752-1081

ホームページ <http://www.kyoto-kyoiku.com/>メール: kyoto-kyoiku@center.email.ne.jp

チリのアジェンデ政権の闘いに学ぶ

高橋 明 裕
(京都教育センター運営委員)



解散総選挙となり、大軍拡を行おうとしている自民党も消費税の食料品限定非課税を言いだしました。右派の参政党、左派のれいわ新選組まで消費税廃止・減税を称え、財源を明示して国民負担を軽減する政策を打ち出している政党との峻別が問われます。野放図な国債発行と大型予算は既に日本国債の下落と金利上昇、円安を招いています。自民党や右派の「ナシヨナリズム」+国債発行による歳出拡大」路線と、「平和と民主主義+責任ある財政運営」路線との対決となっています。国民負担を軽減し、格差を是正するためには大企業や富裕層に正当な負担を求める政策への転換が必要ですが、そうした政権が樹立されたなら、市場や大企業・富裕層は拒否反応を示すでしょう。しかし、それを恐れて政策転換はできないと思います。

一九七〇年に選挙で勝利し、一九七三年にアメリカと結んだ軍部のクーデターによって、大統領府を空軍機が空爆して崩壊させられたチリのアジェンデ政権を記録した映画「最初の年」・「チリの闘い」(三部構成)を観ました。監督は自らも一時、軍部に拘束され、その後、亡命し貴重な記録フィルムを持ち出して復元した。パトリシオ・グスマン監督です。「最初の年」は政権を獲得し、鉱山・基幹産業の国営化を進めるとともに、チリを訪問したキューバのラスト口議長と共闘する様子など、左派政権の実績を記録しています。「チリの闘い」では、まず上流階級の婦人たちが左派政権に対

して抗議デモを始め、運輸会社の経営者たちがトラック運転手にストを命じ、物流を止めます。その資金はアメリカから出ていました。さらに経営者団体がゼネストをしかけます。それに対して、アジェンデ大統領を支持する労働者、市民は職場・工場を自主管理して操業を続け、国民に必要な物資を供給します。バス運転手は人々の足として運行を続け、トラック運転手も市民を乗せて市内を走り続けました。運輸会社のストによって止まった物流は、自治組織をつくった人々が人民商店を立ち上げて商品を供給しました。

忘れられないシーンは、「チリの闘い」第三部「民衆の力」のラストです。工場で自主管理操業を続ける熟練労働者にインタビューします(恐らく、インタビューはグスマン監督本人)。熟練労働者は言います。右派の動きはわかっている。右派に対して断固とした措置をとるべきだ。アジェンデ大統領は右派を排除すべきだ、と。アジェンデはそれをしないまま、空爆されて防衛隊員とともに亡くなりました。インタビューは労働者に「共に闘い続けましょう。また会いましょう」と言って、映画は終わります。恐らく二人は再会できなかったことでしょう。現在の日本でも、国民のための政策に対する市場や大企業の反応に惑わされず、右派の排外主義を断固として排除する必要を学びました。

全国「教育のつどい2025」報告レポート

居場所・児童館のとりくみ

京都府内児童館 宇多野 こころ

はじめに

急加速する不登校人口の増加。「不登校」に対する認知度はかつてより進んでいるかもしれませんが、無理矢理学校に行かなくても、という人も増えている気がします。けれど、子どもたちが息苦しくて行きたくない学校では困ります。「学校へ行かない」選択ができずに苦しんでいる子どももいると思います。こどもたちの成長発達のためにどのような場所が必要なのか、児童館の現場から報告したいと思います。

ー 児童館ってどんなところ？

児童館は、児童福祉法第40条に規程されている児童厚生施設の一つで、「児童に健全な遊びを与え、その健康を増進し、または情操を豊かにすることを目的として設置される屋内型児童厚生施設と規定されています。

わたしたちは、「あそび」は日々の生活の中で、こどもの権利として保障されるべきものと考えます。こどもは遊びを通して自己選択と決定を繰り返します。その中で幅広い興味思考、想像力、他者との調整力を学び、また指先や体幹など体のバランスを整えることなど、こどもが成長発達するために欠かすことができません。

児童館は、全国的に4400か所ほどあり、うち4割ほどが民営となっています。自治体により、その設置状況や職員配

置・処遇はまちまちで、老朽化と少子化を理由に減少傾向がみられます。こどもの権利条約が批准されて30年間、こどもの声を聴いてこなかった社会は、あそびがこどもにとって不可欠であるという価値観が形成されておらず、積極的な予算が付きにくい現状を抱えています。

京都市（18歳未満の人口は13万5千人）の場合は、131館すべてが、社会福祉法人などの民間委託（公設民営）民設民営にもかかわらず、行政と本市児童館学童連盟（現場の職員で構成する団体）が共に指針を作り、充実した研修制度を作っている全国でも先進的な児童館です。一中学校区に1か所以上が設置されており、こどもが歩いて行ける範囲にあります。

また、そのほとんどが学童保育事業を行っており、一元化児童館と呼ばれています。

京都市の場合、児童館は月曜日から土曜日の10時から18時30分まで開館。学童クラブ事業については、土曜日と学校休業期間は、8時から18時30分が利用時間となっています。職員は館長がめらる名の正規職員のみ。また学童クラブを利用する非定型発達の子どものサポートするために有償ボランティア制度があります。

本児童館を主に利用している小学校は、1学年50数名の規模ですが、今年度の学童の登録人数は13名。3クラスを運営しています。

午前中は、3か月ぐらいの赤ちゃんから保育園幼稚園に行くまでの乳幼児さん親子のクラブ活動やあそび場の保障、子育て相談、子育て講座など行っています。午後からは、学童クラブのこどもたちであふれかえる中、ゲーム機をもって遊びに来る小学生、自分たちがやりたくて発足させたクラブ活動や、何かの企画の相談グループ、本棚の隙間に体を押し込んで読書に没頭する子、暇やし来た、という子等々、それぞれに自分の放課後を過ごしているという子等々、それぞれに自分の放課後を過ごしています。また夕方になれば中高生が隙間を見つけてやってきては、仲間同士で遊んだり、小学生の相手をしたり、職員を捕まえて喋ったり、試験勉強をしていたりと自由です。

2 児童館と不登校のこどもたち

2023年度、時折朝から4人の中学生がやってきました。中学3年生の男の子2人と中学2年生の女の子2人です。2人は元学童のこどもたち、あとの2人は、時々遊びに来ていたこどもたちです。最初のうちは、どうしたのかなあ、と気になりつつも、あれこれ詮索せず、そっと見守っていました。しばらくすると中々のKちゃんのお母さんと仲



の良かったMさんがやってきて、「Kちゃんのこと知ってる」と話してくれました。「時々来てるんだけど、Kちゃんのお母さんはどんな感じ？」と聞くと、「なんだか気にしないようにしたいのか、前より働きすぎてて…。あんまり連絡もとれないのよ」と。もし、「何か話したくなったらいつでもいいよと伝えて」とだけお願いしました。Kちゃんのお母さんが来ることはなかったけれど、時々Mさんが気にかけてくれていました。Kちゃんは、小学生の時は快活で頑張り屋さんでよく気の付く子でした。ところが、やってくるKちゃんは、黒い服と黒いマスクに身を包み、なんだか大丈夫？と気になるような雰囲気漂わせていました。職員間でも理由は詮索しないこと、学校に行くが行くまいが児童館は関係ないこと、いつも通りの声掛けをすること、意図統一しました。時折何気ない会話などしていくうちに、Kちゃんは、不登校のこともたちが通学できる中学校に転校したということが分かりました。が、そこも今一つ合わないようで、本人もどうしようかと迷っていました。ただ、イラストが上手で、タブレットを使って書いたものをみんなに見せてくれ、将来はイラストレーターになりたいから、そういう高校に行くのだと目標がありました。一度吐き出してしまえば、本人も肩の力が抜けたのか、少しずつ以前のKちゃんの姿が見えるようになり、児童館のイベントがあるたびにお手伝いをお願いして、快く引き受けてくれました。ついついこちらもお願ひして頑張らせてしまうのですが、本人は、人前で色々するのは疲れから、今年は違う仕事がいよいよと自分の気持ちも主張できるようになっていきました。元の学校に戻って卒業し、自分が行きたかった専門学校にこの春から通い出しました。先

日久しぶりにやってきたKちゃんは、ステキな緑色に髪を染め、マスクは外していました。そして変わらず児童館のイベントのお手伝いを引き受けてくれます。

一足先に高校生になったAちゃんとRくん。彼らは、小さな小学生女子からとても人気で、楽しく一緒に遊んでくれます。彼らも中学時代は黒くてマスクが外せず、なんだか鬱々とした様子でしたが、それぞれに行きたい公立高校へ進学し、軽音部に入って楽しく過ごしています。児童館のまつりなどは、中高生ブースでテイクアウトカフェの売り子をしてくれ、今度は、ステージで演奏させてよというほどになりました。

特に児童館が何をしたいということではないけれど、彼らにとつて居心地のいい場所にしておきたいという気持ちは、どの職員にもあつたと思います。普通にお願ひしたり、中高生のあつまりに誘ったりしてきました。そして、何が原因かはわからない中学校での不登校生活ですが、彼らの口からこぼれてくるのは「学校おもしろくない」でした。

3 地域の中に居場所を

児童館の良さは、0歳から18歳というこどもの成長を長く見守れるということ。そして、その保護者となつたり、地域の人となつたりながら、異年齢世代が緩やかにつながついているということです。

朝、赤ちゃんと触れ合うことで、ほっと和むこどもたちはたくさんいます。赤ちゃんの癒し効果は絶大です。そして、そのお母さんお父さんのまなざしも暖かい。そのままの状態を受け入れてくれます。そんな自然な交流は、わが子が

もし…の時に、児童館に来ていいんだというメッセージにもなっている気がしています。

学校に行っても、行けなくても、行かない選択をしても、どの子も同じ地域で育ちあつこどもたちです。地域に、自分らしくいられる場所がたくさんあることが、安心して大きくなれると思っています。

学区の中には、文庫として居場所を作り出した人、学習支援をしようとする居場所を立ち上げた現役の中学校の先生、自分の家にいつもこどもの友だちが、飯を食へに来ていた。そんなこどもたちを応援したいと食堂を始めたお母さん。地域の中にいろいろな人がいることがステキで、繋がりあつこどもたちが安心して暮らす街にしたいと思っています。

おわりに

サードプレイスⅡ第3の居場所とは、やり言葉のように国は言い出しました。制度ができて、場所だけあつても居場所とは言えません。こどもにとつても大人にとつても、安心していつでも頼つていい場所は、暖かいまなざしで見守り続けている人が、長くいる場所なのだと思います。

同じこどものことを考える時に、学校も地域も保護者もそれぞれの立ち位置で見えることを出し合ひながら、共に考えることが当たり前になってほしいのと同時に、その子がどうしたいのかが大切にされるような社会であつてほしいと願います。

(教育センターの責任で要約いたしました。)

京都教育センター 2025年度活動の報告

「学習指導要領」の問題点を明らかにし、 「学校・教師とは？」を発信しました

1. 第56回京都教育センター研究集会・第75回京都教育研究集会

12月20・21日（土・日）、集会テーマは「どの子ども教職員も行きたくなる学校に！ 憲法と子どもの権利条約が生きる学校と社会を～みんなでつくろう “子どものいのちを大切に、成長を保障する教育”」を掲げた。記念講演は「日本の学校の現状と課題ーなぜ子どもも教職員も苦しいのかー」と題して本田由紀さんが話され、その後のトークで保護者と小学校教員が学校の行きづらさや取り組みを報告した。

参加者は全体会158人、分科会132人。

2. 学習会の開催

センターとして以下の学習会に取り組んだ。

- ・「学校・教師とは？」をめぐる課題を掘り下げていく学習会 4/13
 - ・「対話で学ぶ教師のための学習会」5/10「クラスの中の気になる子ー5月のこの時期にー」
11/1「つながりをどうつくるかー子どもどうし・教師どうし・子どもと教師」
 - ・「改訂学習指導要領」連続学習会 6/28 植田健男さん 11/30 石井拓児さん
- 「京都教科書問題連絡会」として、以下の学習会に共催で取り組んだ。
- ・6/21「授業を貧困化するICT教育を超える」子安 潤さん（愛知教育大学名誉教授）
 - ・12/7「新自由主義と排外主義下の教科書・教育を考える」久保田貢さん（愛知県立大学教授）

3. 教育研究集会・民教委、民研などへの参加

第75次京都教育研究集会分科会は、1月18・25日、2月7日に行われた。共同研究者・世話人として2回でのべ36人が参加し、各分科会の内容検討につとめた。

8月の「全国教育のつどいin埼玉」に参加した。

4. 季刊誌「ひろば・京都の教育」の発刊

- ・222号（5/1） ①教えることの楽しさ ②地域で子どもが育つ
- ・223号（8/1） ①今、性教育の大切さ ②ホントはいい教育したいのに
- ・224号（11/1） ①京都府の子育て・教育は今 ②今、性教育の大切さ2
- ・225号（2/1） ①どの子ども教職員も行きたくなる学校に！ー京都教育センター第56回研究集会・第75次京都教育研究集会ー ②宿題って、ホントに必要？

5. 「センター通信」の発行 〈2025年度執筆者一覧〉

167号	山岡雅博／野井真吾	170号	毛戸裕司／京都高校生平和ゼミナール
168号	宮下直樹／野井真吾	171号	山崎洋介／山川智美（福知山）
169号	葉狩宅也／山内さやか・西田陽子	172号	高橋明裕／宇多野こころ（児童館）

6. 出版活動

「学校・教師とは？」プロジェクトで、ブックレット第3分冊「戦後京都の教育から学ぶもの」（仮）を準備中。第1分冊、第2分冊、「あるがままのあなたでいいよ」など、これまでの出版物の普及。

7. 研究活動

「地方教育行政」「生活指導」「学力・教育課程」「発達問題」「子どもの発達と地域」「民主カウンセリング」「高校問題」「教科教育・国語」「障害児教育」の9つの研究会があり、それぞれ独自に研究活動を展開している。研究会員募集中。

8. 事務局・運営委員会体制

代表:山岡雅博 顧問:野中一也 研究委員長:高橋明裕 「ひろば」編集長:相模光弘 事務局長:本田久美子
運営委員(上記含め): 植田健男 恩庄 澄 築山 崇 川地亜弥子 毛戸裕司 葉狩宅也 丹羽 徹
宮下直樹 深澤 司 西田陽子 松岡 寛 細田俊史